

「イエスの言われる神殿とは御自分の体のことだったのである。」

(ヨハネによる福音書2:13-22)

今週の福音は、「宮清め」の箇所です。舞台は過越祭が近づく、エルサレムの神殿。過越祭とは、主なる神がエジプトでの隷属状態からイスラエルの民を救い出したことを記念する祭りです。今日の旧約聖書で読まれる『十戒』の前文にも記されている通り、神によるエジプトからの救出は、イスラエルの民にとっては救いの原体験であり、神が自分たちを救うことを保証する出来事です。ですから、そのことを記念する過越祭はイスラエルの民にとって、非常に重要な祭りでした。さらに、過越祭は同時に、エジプトから救い出してくださった神が再び救いを実現する時、つまり救い主メシアによってもたらされる救いを待望する祭りでもありました。過越祭が祝われるエルサレムは、終末の時にすべての民が巡礼に訪れる聖なる都として、救済の希望を象徴する町でした。今日の福音は、過越祭近くのエルサレムに主イエスが訪れことで、主イエスによっていよいよ救いを実現する時が訪れることを暗示しています。

主イエスの神殿での行動は驚くべきものでした。当時、神殿祭儀では犠牲の動物が必要でしたので、動物を売る商売人がいました。また、神殿税を収めるために、ローマの硬貨からイスラエルの硬貨への両替が必要でしたので、両替商もいました。しかし、主イエスは神殿に入ると、動物たちも両替商たちも蹴散らしてしまうのです。そして、鳩を売る者たちに向かって「わたしの父の家を商売の家としてはならない」と厳しく言いました。この主イエスの言動の背景には、ゼカリヤ書14:21「その日には、万軍の主の神殿にはもはや商人はいなくなる」という預言があります。人々にとっては理解し難い主イエスの行動ですが、そこには「その日」の到来を告げる象徴的な意味が込められていたのです。主イエスは羊と牛を追い出しましたが、これはヨハネによる福音書だけの記述です。他の福音書では鳩だけです。ヨハネによる福音書が羊と牛をわざわざ記したのは、「その日」が訪れ、神殿が商売の家でなくなる時には、いけにえとしてささげられる羊や牛はもはや必要ではなくなることを伝えるためです。「その日」は、主イエスが自らをいけにえの羊として十字架の上にささげ、死ぬことにより訪れます。これにより、いけにえの動物はもはや不要となり、神殿は商売の家でなくなります。ヨハネによる福音書を注意深く読むと、主イエスの死の時刻と、過越祭でいけにえの羊が屠られる時刻が重ねられていることに気がきます。これは意図的なもので、主イエスがすべてのいけにえに変わったことが、これにより示されているのです。主イエスが自らを十字架の上にささげ、「その時」が訪れます。それ以降、人は神殿で動物をささげて礼拝をする必要はなくなり、主イエスという神殿において、神に結ばれ、神へのまことの礼拝をささげることができるようになるのです。主イエスは神殿から動物を追い出すことで、自らがいけにえの羊としてささげられる、あたらしい礼拝の時が近いことを告げています。この

出来事が、過越祭が近づくエルサレムで起こったこともまた、偶然ではありません。

この出来事を目撃した弟子たちとユダヤ人たち、それぞれの反応が描かれています。まずは弟子たちですが、彼らは「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」という聖書の言葉を思い出しました。「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」とは、詩編69:10にある言葉で、主イエスの十字架での死を指していると考えられます。他方、ユダヤ人たちは主イエスの行動に腹を立てました。そして、一体何の権威があつてこのようなことをするのかと主イエスに迫り、「しるし」を求めます。主イエスはそれに対し、「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」と答えます。「イエスの言われる神殿とは、ご自分の体のことだったのである。」とある通り、主イエスは自らの体を神殿と言ったのですが、人々はこれを聞いても何のことかさっぱり分かりません。「三日で建て直す」と訳された言葉は、「三日で起こす」と訳することができる単語で、「復活」を表す言葉です。つまり、主イエスの「しるし」とは、ご自身の受難と復活なのです。これによってこそ、もはや神殿で動物のささげものは不要となり、神殿は商売の家ではなく、主イエスによつてもたらされる救いを祝う、まことの礼拝の場所へと変えられるからです。しかし、ユダヤ人たちは主イエスの言葉を理解することができません。そして、主イエスはといえば、この誤解を解くこともせず、むしろ誤解を背負ったまま、「しるし」の成就のために、十字架へと向かつて歩いて行くのです。

主イエスが神殿から商売人を追い出したのは、「神殿に対する熱意」ゆえではありません。「神への熱意」ゆえです。神殿はたしかに神の住まいとされた場所でした。けれどもそこは、簡単に人間の欲望の住処に変わり果ててしまいます。主イエスが訪れた時の神殿は、商売の家となつてしまっていました。主イエスはそのような神殿を建て直すために、十字架へと向かいます。そして自らをいけにえの小羊として差し出します。過越祭での願いの成就、救いの実現は、人間を救おうとする神の意志と、その思いを受けて死に至るまで従順に歩む主イエスによりもたらされます。しかし、主イエスと沢山の時間を共有した弟子たちですら、「イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉を信じた。」とある通り、主イエスが復活されるまで、主イエスによる救いを理解できませんでした。神殿を教会と言い換えるなら、わたしたちも同様に、いくら教会に通い詰めたとしても、それだけでは、主イエスの神殿でまことの礼拝をささげることにはできません。主イエスの受難と復活という「しるし」を通らなければならぬのです。主イエスは、「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」と言われた通り、人々の悪意、罪により十字架上で殺されますが、三日後に復活します。これにより、主イエスこそが神の救いを告げる、まことの神殿としてわたしたちに示されたのです。そうであるからこそ、今日の使徒書でパウロが「主イエス・キリストを通して神に感謝

いたします。」と祈ることができるのです。

わたしたちは教会を商売の家にしていないだろうか。人間の思いの支配する場所にしてしまっていないだろうか。大斎節、あらためて振り返りましょう。そして、あらためて主イエスのご受難とご復活の出来事を、この目で、この身で受けましょう。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」ということによって示された「しるし」。主イエスの受難と復活という「しるし」を通してこそ、わたしたちはパウロと同じように、まことの神殿としての主イエスにおいて、神へのまことの礼拝をささげることができます。神はわたしたちをいつでも、この主イエスの神殿へと招いています。